

『ワイルド全集』を訳了して

西村孝次

しずかな、つめたい、なにかに重苦しく抑えつけられているような朝であった。

わたしは夜を徹して机に向かい、ようやくひとつの仕事を上げることができた。ふっーと深い呼吸をして、わたしは窓をあけた。いちめんの眩しいばかりの銀世界——わたしの小さな千駄ヶ谷の家に、こうして一九三六〔昭和十一〕年二月二十六日が訪れる。そのとき、この日が、のちにいわゆる「二・二六」として知られるようになるなど、わたしとしては知るよしもなかった。

その原稿が、わたしにとってのワイルド翻訳の最初のもの、『ドリアン・グレイの画像』（一九八〇年以後、『ドリアン・グレイの絵姿』と改題）であって、その年の秋に岩波文庫の一冊となって出た。ああ、よかった、と大喜びしたのも束の間、たちまち大目玉をくらう破目になった。バジル・ホールワードの画室で、かれがドリアン・グレイとの初対面のことをヘンリー・ウォットン卿に語る第一章の冒頭のあたりで、わずか六語にすぎないが一文‘… : it was a sort of cowardice.’ (*The Picture of Dorian Gray* [Oxford English Novels], p. 6) が脱落しているぞ、と指摘されたからである。

もし訳の巧拙を問われたのなら、そこはなんとか答えようもある。しかし、この過失にたいしては、もはやいかなる弁解の余地もなかった。

その年から数えて四十四年目に、わたしはワイルド全訳の機会にめぐまれる。それは怠け者で遊び好きのわたしという男には、まさに嬉しい悲鳴にほかならなかった。しかも全五巻を五ヶ月で完結する、というのが、とにかく出版元・青土社からの依頼である以上に、これを購読してくれる人たちへの信義なのだ。わたしは二千四百六十三頁を一九八〇年十一月から翌年の三月までに公刊した。

さすがに疲れた。それをすっかり癒やすためもあって、その後しばらくワイルドから離れている。

そのうち、しかし、もう一度、さらに心を磨き思いを新たにして、ワイルド再訳に専念することになるであろう。ワイルドの時代は「世紀末」と呼ばれているが、はたしてそれは「末」なのか、という疑問と、いや、それはつぎの世紀、つまり二十世紀の「始め、始まり」なのだ、という確信が、わたしをゆり動かしてやまないからである。そうした視点からワイルドの人生と文学を見直そうとするのは、わたしひとりの願いにとどまるだろうか？（元明治大学教授）